

内観および家族内観による心的変化と描画表現

○國井陽介 1) 時岡かおり 1) 太田健介 2)

1) 心理士 2) 医師

医療法人耕仁会 札幌太田病院 内観療法課

1. はじめに

当院では、内観療法（以下、内観）修了後、希望者に家族内観を実施している。家族内観では内観での気づき、お礼やお詫びの気持ちを言葉で共有し、家族関係の回復や成長を目標としている。今回、内観および家族内観と共に描画法を実施した症例について、内観の経過と共に描画に表現された心的変化を考察する。

2. 方法

不登校・インターネットゲーム依存を主訴とした思春期患者（A 氏 10 代前半 男性）と、その父母に対して内観前、内観終了時（A 氏のみ）、家族内観後に描画法を実施した。自己像や家族像の変容過程を把握するため、描画法には S-HTP を用いた。

3. 内観の経過と描画の変化

入院初日、A 氏と父母に S-HTP を実施。A 氏の描画は筆圧が弱く、描画特徴からは家庭基盤の弱さや意欲の低さが窺えた。父母の描画はやや羅列的で情緒的表現の乏しさが見られた。翌日より集中内観を開始し、言語表現の拙さあるものの内観 3 問に沿って調べられた。入院 8 日目、家族へのお礼やお詫びと共に、ネットやゲームの時間を減らす、家事の手伝いをする決意を述べ、集中内観修了。直後の S-HTP では友人と遊ぶ場面を描き、絵全体が円の形を基調とした構成へと変化した。入院 20 日目より院内からの登校を開始。入院 33 日目、自宅での内観を終えた父母来院のもと家族内観を実施。抵抗を示しつつも父母にお礼とお詫びを伝えた。母からの手紙の内容に対し、A 氏は「嘘が多い」と受け入れ難さを言葉で表現した。家族内観の場では言葉数の少ない A 氏であったが、終了後の S-HTP は動きと奥行きのある登校場面を描き、自発的に説明を加えた。描画特徴からは活動性の上昇や自立心の芽生えを示す特徴が見られた。母の描画には動きが加わり、父は家庭内の日常が描かれるなどの変化が見られた。また、父母共に家の基底線が描かれず、家族内観を終えて宙に浮いた感覚を抱いていることが窺えた。

4. 考察

A 氏の描画から情緒的な成長、自立心や活動性、パーソナリティの豊かさの増加などが見られ、内観および家族内観によって自己の多面性への気づきや統合、心身機能の回復が成されたものと推察された。父母の描画もまたエネルギーの増加、僅かながら情緒的な豊かさが生じ、家族内観を通して家族の温かさの実感が得られたものと考えられた。一方、言語や情緒的交流の少ない家族には家族内観での体験は非日常的で「宙に浮いた感覚」が生じる事が示唆された。家族システムは変化が生じると元に戻ろうとする働きが生じるため（布柴,2008）回復や成長には家族内観に加えてその後のフォローが有効であると考えられるが、描画法はその方向性や実施効果を検討する上で一つの指標になり得ると考えられた。

【参考文献】 三上直子（1995）S-HTP 法 統合型 HTP 法による臨床的・発達のアプローチ